

< 研究成果の紹介 >

カキ「前川次郎」の予備枝設定における適切な切り戻し程度

園芸グループ

1. 成果の内容

カキ栽培では、翌年の結果母枝を安定的に確保するために予備枝を設定することが極めて重要です。しかし、予備枝の設定法には明確なデータがなく、経験に頼るところが大きいことから、結果母枝が安定して得られない場合があります。また、近年省力化を目的とした棚栽培が注目されていますが、限られた平面空間を有効に利用するためには、結果母枝の安定的な配置が必要であり、そのためにも予備枝の設定が重要です。そこで、カキ「前川次郎」を用いて、予備枝として用いる1年生枝の条件（太さ、長さ、発生角度）と切り戻し程度について検討を行いました。

その結果、1年生枝を切り戻して残す長さ（予備枝長）を10cmとした場合、用いる1年生枝の条件に関係なく枯死する枝はなく、予備枝長5cm以下では、用いる1年生枝が細かったり、短かったりという場合には枯死率が高いということがわかりました。また、処理後1シーズン目に予備枝が

ら発生する新梢と結果母枝として使用可能な新梢は、本数は予備枝長3、5、10cmで差はなく、さらに、処理後2シーズン目の着花数は予備枝長による差はありませんでした。

以上のことから、予備枝を設定する場合、切り戻して残す長さを最低10cmとすることにより、用いる1年生枝の太さ、長さ、発生角度に関係なく、安定的に結果母枝が得られる予備枝となります。

2. 技術の適用効果と適用範囲

カキ「前川次郎」栽培における予備枝の切り戻し程度の指標として利用できます。

3. 普及・利用上の問題点

試験に用いた樹は、処理時に5年生で、棚栽培の一字仕立てですが、立木仕立ての樹でも、予備枝を設定する部位が日陰にならなければ、今回のデータが使用できると思われれます。

（伊藤 寿）

表1 予備枝長別の枯死率と新梢生育

処理区	枯死率 (%)	新梢本数 (本/予備枝)
1cm	89.2	1.8
2cm	68.7	1.8
3cm	31.8	2.1

注) 平成8年2月処理

表2 予備枝長別の枯死率、新梢本数、着花数

処理	枯死率 (%)	新梢本数 (本/予備枝)	母枝本数 (本/予備枝)	着花数 (個/予備枝)
3cm	38.0	2.0	1.4	1.5
5cm	17.8	2.3	1.2	1.0
10cm	0.0	2.1	1.2	1.3

注) 平成9年3月処理。枯死率、新梢本数は処理当年に調査した。母枝は充実した花芽を持つ新梢とした。着花数は処理翌年に調査した。